

民俗Ⅱ－かつての暮らしと習わしの記憶から

蕨 由美

高津新田の民俗については、27号で「カラスビシャ」・「子安講」・「千葉寺十善講大師廻り」などの今も続けられている民俗行事を紹介した。

今年度はその続きとして、もう過去のこととなってしまったかつて高津新田の暮らしと習わしについて、旧家のご婦人に思い起こして語っていただき、そのお話をまとめた。

お話いただいたのは、次のお二方で、また稲垣実枝子様からは、「ハツセ」を記録したノートと録音テープをお借りしたので、あわせて資料としてご紹介したいと思う。

稲垣（屋号カンエモン）実枝子様（昭和6年生・新木戸から嫁入り）

和田（屋号キュージロ分家）ふさ様（昭和2年生・カドインキョから嫁入り）

I 人生儀礼について

1. 婚礼

新木戸から実枝子さんが昭和29年に稲垣家に嫁に来たとき、自宅に髪結いが来て、仕度をするのとタクシーが迎えに来た。ふささんは、同じ村内への嫁入りだったので、荷物をオート三輪で運んだという。

婚家の玄関を入る時、菅傘を頭の上にかざし、下に「ササメ」という草を燃やしてそれを踏んで入った。「ササメ」は、ぞうりなどにするつやのある丈夫な草のことである。

稲垣家の婚礼では、奥座敷には40人ぐらい客がいて、メチョウ・オチョウの男女の子供が酒注ぎ①をした。

大きな皿にボラが背合わせに飾っており、それを皿の上で腹合わせにする。ボラは出世魚で、鯛の代わりかもしれない。

足のある島台に蓬菜を飾った。この島台やおぜんなどは、博物館へ寄贈したが、客に蕎麦を作って出す時に使った蕎麦ちょこ40杯と汁を入れる土瓶②が、今も残っている。また「オツキ」という餡ころ餅を用意して、翌日食べたりした。

「ヨメッゴ、ミニイグ」といって近所の人がお道具を見に来て、その人たちにも振る舞いをしたし、また遠くからの客が泊まってたいへんだった。

祝宴のための膳や椀については、共同のものを借りることもできた。



①婚礼の杯



②蕎麦ちょこと土瓶

2. お産と宮参り

そのころは実家に帰って子供を産んだ。3日目に「ミカメノモチ」という餠をつけたばた餅を食べた。

女の子は33日目、男の子は42日目に戻ってきて、産土の諏訪神社にお参りし、近所に披露した。最初の子には仲人さんがついてきた。33日と42日は女と男それぞれの厄年にちなむと聞いている。

御重1箱のお赤飯を持ってきて、椿や榊の葉を採って、それに赤飯をのせて小さな各お祠全部に供える。その残りを「ハチロベー」の家（諏訪神社氏子総代の大木家）に持っていくと、氏子になったしるしとして、お守りを下さった。ハチロベーでは、二宮神社から氏子総代としてお守り札を預かっている。

最初の子が女の子なら総領娘として婿をとることもあり、また子供が生まれなければ、夫婦養子をとって、「子なきは去る」のようなことも、家を絶やすこともなかった。

3. 里帰り

富塚（白井市）から嫁に来たハチロベーのおばあさんのころの里帰りはたいへんだったと、子守りだったアンバのばあさんに聞いたことがある。

馬方がついた馬車には座布団を敷いて若奥さんが乗り、道が悪いので子どもは子守りが背負って歩いていった。半日がかかりでお重箱につめたお弁当を持って行き、馬方も子守りも一緒に何日も泊まってきたから、富塚の家もたいへんだっただろう。

4. 稲毛の浅間神社にお参り

一、三、五、七歳になった7月15日には、稲毛の浅間神社大祭（③）に、歩くか、京成電車か、荷車や自転車でお参りに行った。

本殿にお参りしてから、船の上に板を並べた橋の上を歩いていくと、海辺（14号線の先は海だった）の鳥居で、神主がお祓いをしてくれる。橋の上は歩くと板が揺れて子供がきちゃきちゃと喜んでいて。暑いところで、子供は氷を食べたがったりした。虫籠の入ったキリギリス、麦わら細工に入った海ほうずきなどが売られていた。

おひねりをいただいた仲人さんや子供の夏着を贈ってもらった実家などに、帰ってからお札と桃とうちわを土産に配る。女の人には息抜きだったが、帰ってから土産を届けなければならないという気苦労もあった。

5. 七五三



③稲毛浅間神社大祭の本殿



④浅間神社参拝記念の団扇

男の子でも女の子でも最初の子が7歳のとき、七五三を「ヒモトキ」といって、仲人さんと呼んで盛大に祝った。

入学祝として、たんすや机などを用意する実家の負担もたいへんだった。

6. 葬式

ムラの人が亡くなると、どの家でもうちで葬式をした。隣近所8軒の「キンジョツキアイ」があって、3日間、一軒2人ずつ手伝いに行き、両隣が仕切る。「ムラジンセキ」のうちは近所でなくても手伝う。

不幸を聞くと、まず「ツゲット」といって2人ずつ1組になって、遠い親戚まで通知に行く。白井の富塚まで行ってもらったこともある。行くとその家では、オヒネリやお酒を出す。ツゲットの次は、通夜、次の日が葬式、その翌日は、後片付けしてお寺に「四九の餅」をついて持っていく。

墓地は、屋敷の近くや、垣根のすぐ近くにあった。位牌は跡取りが持ち、かかとのない藁ぞうりを履いて、門を出たら脱ぎ捨てた。

昔は土葬で、「ロクドウ」は深い穴を掘る役目で重労働だったから、「アナミマイ」といって休憩の時のお酒と御重と酒の肴を届ける。

葬式が終って家でご馳走する時は、ロクドウとお寺さんが上座、親戚はその次だった。ロクドウには煮物を持たせたり、魚に切り身など特別のご馳走をつけ、寸志も多くした。

ロクドウの着物は水色の木綿の洗いざらした作務衣で、終るとよく洗って干し、観音堂にしまっておいた。六尺の木綿は腰に巻く。これも終ると洗ってアイロンをかけ、たたんでこれはロクドウの家に届けた。

ロクドウは、回り持ちで、女所帯でも必ずどの家も皆やったが、ハチロベーだけは神主だったから除外されていた。

二升なん合かの餅をつき、6個はロクドウに届け、四九の餅はわらの「ツトッコ」に入れ、葬式のあくる日お寺に届ける。そのうちひとつ大きな餅を持ち帰り、木のふたの上で小さくちぎって塩をつけて食べるが、おいしいものではない。二度と無いようにという意味か、まずいものだった。お寺からの帰りは、後ろを見てはいけなとか、玄関から入ってはいけなとか、いわれた。

「テツダイ」の男の人はお寺さんへ行ったり、「チョウバ」などの役割があった。台所は女の仕事だが、男が料理するところもあるそうで、白和えを上手に作れる人も多いらしい。

親戚の人たちが、ロクドウ、テツダイ、念仏講にいくばくかのお金を包んで渡すが、「オクヤミ」といって近所はお金のほか、自分たちが食べる分として、昔は米や野菜などを持ち寄っていた。

「タチビ」と四九日には、下に餡がないぼた餅を作って食べる。タチビとは、翌月の同じ日付の日のこと。

最近斎場などで葬式をやるようになった。八千代斎場のところは、焼き場で寂しくて通るのがこわいところだった。火事で焼けてから、地元が反対して斎場になった

という。

Ⅱ 年中行事と祭礼・講

1. 節分とツジキリ

節分は「カツカゴ」という六ツ目かごの中にわらざうりに入れ、竹ざおにくくりつけ、戸袋などにヒイラギとマメガラを刺し、豆まきに行く。カツカゴは芋が20kg入るぐらいの大きさだった。

ツジキリは、昭和35年ぐらいまで、2月15日、辻々や個人の家でやっていた。大蛇を縄でなつて、やつでの葉と唐辛子、線香を半紙でくるんでつけた。



⑤花島観音のわらじ売り

2. 花島観音参り

4月18日の縁日は、皆、それぞれ花島観音へお参りに行って、足が達者でいるように毎年わらじを買い求める。(⑤)

そのわらじは玄関につるしておき、翌年行った時に山門に結んでくる。(⑥)

「花島講」もあつてお金を集めたりしていた。近くですぐに行けたし、お店も出るので楽しく、今もお参りに行っている。



⑥花島観音山門

3. 市川の地藏さま

桜の咲くころ、国府台からバスで「ネモトデラ」に行った。世話人4人（ブンケとシチベイ、チョウゴロー、セイザ）がいて、当番がお参りに行った。

近郷近在からたくさん人が来ていて、嫁に行った女学校のころの友達に行き交ったりしたから、志津などからも来ていたようだ。

4. 大師まわり

大師まわりが村を回って来て、どこの家に適齢期の人がいるなど嫁取りの話もしていた。歩いて回りながら自分の足と目で、各村の作柄を見て参考にするなど、情報を得るよい機会だったらしい。

5. 畑の子安さま

5月7日に当番が畑（千葉市）の子安さまへお参りに行った。(⑦)

子安講とは別で、講元は、畑から嫁いで来たTさんと畑にオバサンが嫁いでいるセイザシンの2軒が



⑦畑の子安神社（千葉市）

世話人をやっている。

家順で 4 人の当番（4 軒か 5 軒）が 40 軒ぐらいからお金を預かってお参りにいく。祝詞をあげてもらいお祓いをしてもらうと、赤飯とたくあんがでた。

昔は当番でなくても、子供を負ぶっていった人もいたが、姑さんに行ってこいといわれないと、当番の時以外は出られなかった。

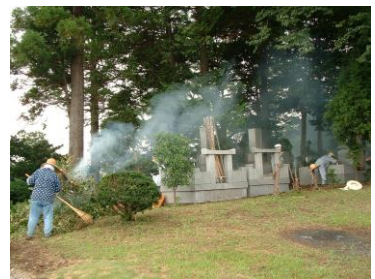
子安神社は三山七年祭の母役という由緒があり、その安産の腹帯は皇室に進上しているとか。孫が生まれる家では、特別祈禱して腹帯をもらってきた。

6. お盆

お盆の数日前に一族が集まって、墓掃除をする。(⑧)

13 日に迎えに行き、団子を、14 日は昼にそうめん、夜はお弁当を作る。15 日はまた送り日団子を作る。

割り竹にマコモをぐるぐる巻いて「オゼン」(⑨)を作り、蓮のかわりのサトイモの葉にナスとキュウリの細かく切ったもの、洗い米をのせ、お墓に供える。カンエモン家のように花を散らす家もある。



⑧墓掃除

7. 三山の七年祭見物

6 年毎の秋の三山（船橋市）の七年祭 (⑩) には、高津新田は参加していないが、高津や畑・武石・三山などの祭りに参加する村に親戚がある家も多かったので、一緒に見物がてら遊びに行ったりした。

年頃の娘がいたら着物を作ってやり、また三山の親戚の家に材木を持って行って、栈敷を組んで見物した家もあった。



⑨「オゼン」を作る

8. 男の人の講

昔は「オーシュッコ」（＝奥州講）があり、おじいさんは奥州参りにも行ったらしい。高津新田に真言宗の人は少なく出羽三山碑はないので、近くのムラの講に誘われていったのかもしれない。

富士講もあったという。



⑩三山七年祭

9. 御師さん

昭和 28 年ごろまでは、冬になると戸隠神社（長野県）の御師さんが来て、世話人の家を回って歩きながら、御札を配っていた。御籤をその先生（御師さん）に解説してもらった。

「市川的地蔵様」も来ていた。四角い箱を背負っていて、隣村までの送り込みに子供たちもついて行って、行った先でお菓子などをもらったりした。ほかにも四角い箱

を背負ったひとが回って来ていたようだ。

10. 子安講

子安講は、昔は手料理を一品ぐらいつ持ち寄って、作り方などの情報交換などお嫁さんのコミュニケーションの場だった。（「史談八千代」27号参照）

姑さんにもおおいばりで出て行けたが、親の世代が長く子安講をやっている家では、なかなか嫁に番が回ってこなかった。

11. 馬頭観音の供養

公会堂の前の「ウマ」（＝馬頭観音塔）は、道路整備で移転した時に集めたもので、それぞれの家の持ち主がいる。天保11年の馬頭観音は、カンエモン家のもの。和田家の墓地にも古い馬頭観音（享保16年銘）がある。（⑪）お参りの際、線香と花、オゼンは自分の「ウマ」にだけ供える。

馬は遠出などの荷馬車に使われていた。牛と違い飼育にも手間がかかったが大事にされていた。



⑪ 享保16年銘の馬頭観音

12. お墓参り・改葬

お墓参りは「ついで参り」はいけないといわれた。

カンエモン家では、西野から墓地移転の時（明治7、8年ごろ？）、土葬の遺骨を甕に入れて持ってきて墓に入れた。

Ⅲ 感想と考察

実枝子さんとふささんに「何かからお話しましょうか」と聞かれ、「お嫁に来られた時のことから、お子様の子育て、先々代の見送りなどとお聞かせ願えますか」とお頼みすると、「そう、女の一生を話せばいいのね」と言って、過去の記憶をたどりながら、わきあいあい楽しく語っていただいた。

お話いただくうち、三山七年祭見物のくだりのように、思わずほろりとさせられるお話もあった。それは三山の神社で新木戸の実家の親たちと会って、「一緒においでよ」と誘われても、婚家では飼っていた牛の世話もあって気軽についていくわけには行かず、甥子が持つ風船が遠く離れてだんだん小さくなっていくのが悲しかったという実枝子さんの思い出だった。

以上のような内容のほか、「ドブタ」といわれた水はけの悪い足太方面の水田の様子や、昭和32年に八千代台小学校を、昭和40年に八千代台東小学校開設したとき自分たちの学校という意識で積極的環境整備に奉仕したことなどの八千代台団地の成

立にとって大事な歴史も伺えた。

ここ数年、結婚式はもちろん葬式も家で行われなくなり、また風格と歴史はあっても寒くて暗い古い家屋から、家を新築した旧家も多くなった。年中行事も盆行事のように個人の家単位で続けられているが、「オゼン」を作るマコモの入手に苦勞するともいう。

今は、江戸時代に苦勞して開いた水田もなく、また、農業を営んできた旧家も核家族化して、農業生産での収入から不動産経営などにシフトしているが、それぞれ、自家の消費分の野菜作りは続けておられた。

年中行事で注目したのは、「初宮参り」や「七五三」のオビトキでは、男女の区別なく先に生まれた子を、将来の後継ぎの長子として、親戚や村人に披露したということである。

君塚家の墓誌（ ページ参照）から相続の系図をたどってみると、「長女・二男」と記載されていることもあり、この場合「二男」とは旧戸籍でいう「長男」のことで、男女に関わりなく初生子である長女が婿養子を迎えて家を継いでいる。

このような男女を問わず初生子に相続権を認めた初生子相続は「姉家督」とも呼ばれ、東北・北関東・新潟県に見られたという。ただ初生子が女で、のちに弟が長男として生まれた場合、明治民法の嫡長男子主義に背くこともあって、この慣行は明治中期以後廃れていったといわれているが、家内労働力の確保とイエの維持継承を目的として、実際に長女夫婦が相続した例もあった。（＊1）高津新田の場合、もっと事例を調べてみる必要があるが、婿養子も実際に少なくなく、またオビトキなどの民俗行事に残ってきた初めての子の成長を祝う慣習からも、男系継承を絶対視しない初生子相続の慣行を推定できると思う。

高津新田の女性たちは、日ごろはよく働くとともに、さまざまな寺社への参詣し、また子安講以外にも、いくつかの寺社への代参の講を組織してきた。

中にはほとんど断片的な記憶としてしか残っていない「市川的地蔵さま」のような講もあり、今回のお話を手がかりに国府台の根本寺を訪ねたところ、この寺の地蔵尊には「安産子安の時間の地蔵さま」として、都合のよい時間にお産が無事できるご利益があり、毎年4月12日～15日の大祭には、地蔵講の婦人たちでにぎわう寺院であることがわかった。（＊2）

また、稲毛の浅間神社へ子育て祈願にお参りし、団扇と桃を記念の土産として配る慣わしは、現代でも続いている。

女性にとって、お産と子育てはたいへんなことであった。今回の調査を通し、昔も今も神仏に祈り、助け合いながら、ムラ社会の中で女性の連帯を深めていったのだと感じた。

最後に、ご協力いただいた稲垣三枝子様と和田ふさ様に深く感謝いたします。

IV 資料

①「ハツセ」の歌詞（原資料：昭和48年ごろの稲垣三枝子様のノート）

「家うつり」

1. あらやしきあらきづくりで いづくのとうりょうがたてたやら
たてぞろい ひばにひのきで くさびもいらぬで たてたやら
こやぐみのあげたところは まつだい長者とくみ上がる
2. これさまのやかたづくりは 祝のまどが四つござる
南からは 福が入りこみ 北からえびす大こくよ
西まどは 祝のまどだよ 東まどは すえはんじょう

「三つ目の祝」

1. これさまのおまごどのは ごなんどきに うまれきた
あさはやく おひのおいでし おのさすときうまれきた
2. これさまのおまごどのは おぼのおゆをみもうせば
しろがねのたらいをひきよせ こがねのひしゃくでおゆかける
3. いちばんのおぼうおけは しょにんあいきょうとおゆかける
にばんのおぼうのおけは ごじゅみようながきとおかけやる
さんばんのおぼうのおけは まつだいちょうじゃとおかけやる

「五月節句」

1. これさまえまერი申して のぼりざおを見申せば
のぼりざお一丈五尺で のぼりが一丈二尺なり
ふきながし一丈五尺で めちょうおちょうのかざりもの
2. これさまえまერი申して おくの一間を見申せば
これさまのおまごどのは 祝の刀がかけてある
これこそはおまごどのは あくまはらいの刀かな

「三月の節句」

1. これさまのだんなさまは 見ごとなひなだんかざりたや
我々も友だちさそいて ひな見物にまいりたや
2. これさまのだんなさまは みごとなひな かざりたや
一の間はおだいりさまだよ 二の間は右大臣、左大臣
三の間は五人ばやしで はやしかぐらで おめでたや

「七つの祝」

1. これさまのおまごどのは 七つ祝でおめでたい
おびにえこおび 今日からは尺長巾広よ

- 後にはふくを結んで おぼすな様えごさんけよ
2. これさまのおまごどのの おぼすなまいりを見申せば
つるかめをさきにたてそう えびす大こくあとにして
中に立つおまごどのは 祝の小袖が七がさね
 3. おぶすなえまより申して 何をほうびにいただいた
一小ばん 二にはごじゅみょう 三におおぎをいただいた
扇などは めでたいものだよ まつだい長者とひらくべし

②根本寺和讃

(2003.6.21 根本寺で入手のリーフレットより)

「御本尊安産子安時間の地蔵尊へとなへ奉るご和さん」

きみようちようらい
婦命頂礼地蔵尊—ここに千葉県市川の

ねもとちよう 根本町 ねもとでら なる あんざんこやす 根本寺—安産子安の地蔵尊

だいじひだいひ 大慈悲大悲のみこころは—とうとや にょにん 女人の しつさん 出産を

ね 願ごう じかん 時間にやすらかに—ご しゆご 守護たもふありがたや

れいけん 霊顕月日にあらたにて—時間 あふ 地蔵と仰がるる

これぞ力明 りきみようしようにん 上人の—誓 ちか ひは よ 代代に増すならん

南無や じかん 時間の地蔵尊—南無や だいひ 大悲の地蔵尊



根本寺安産子安地蔵の御札

*参考文献

1. 『日本民俗大辞典』2000 吉川弘文館、
竹田旦『家をめぐる民俗研究』1970 弘文堂
2. 『いしかわ民俗誌』萩原法子 1985 崙書房